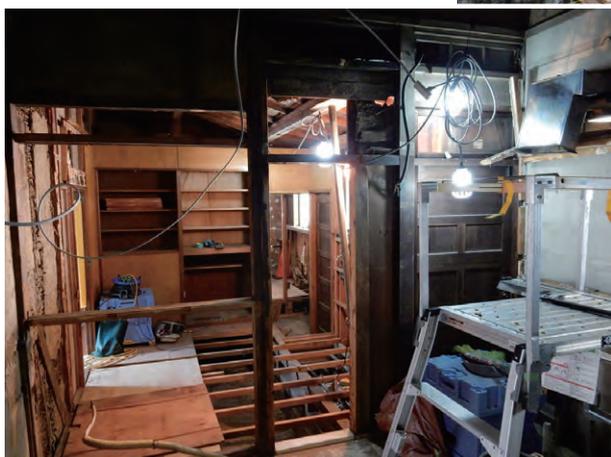
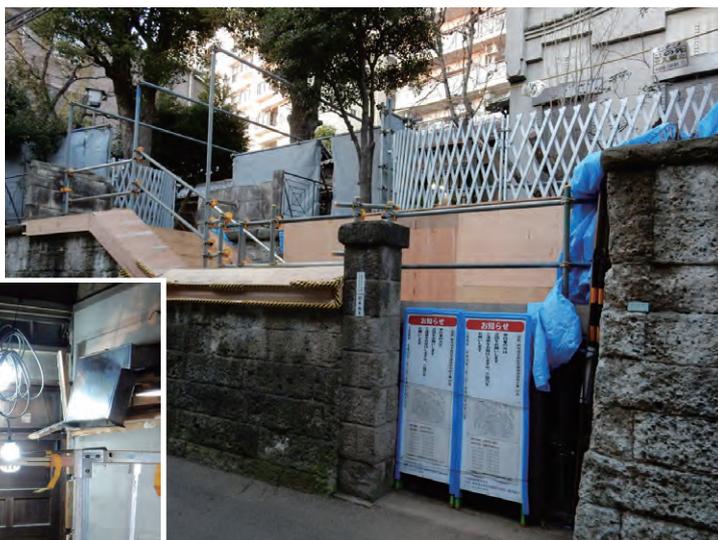


かたりべ123

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

写真右：旧鈴木家住宅は約3mの擁壁の上に乗っているため、安全には十分配慮の上、工事期間中は敷地の外周に仮囲いを設けています。今後、外部工事を行う際には建物の周囲に足場と素屋根を設置して、全体を覆います。



写真左：改修工事に先立ち、壁や天井、床といった内部造作を一度解体して、建物の老朽化による破損状況を確認しています。

この調査結果をもとに最終的な工事の方針を定め、工事を進めていきます。

（仮称）鈴木信太郎記念館保存改修工事のお知らせ

『かたりべ』一四号より連載している「旧鈴木家住宅」の資料たちでは、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」を改修・整備して開設する「（仮称）鈴木信太郎記念館」の公開に先立ち、建物やフランス文学者・鈴木信太郎について紹介しています。

二〇一〇（平成二二）年、豊島区が「旧鈴木家住宅」を取得して以降、公開に向けて二〇一二～二〇一三年にかけて建物の基礎調査、資料調査を行いました。その後は、資料整理や展示設計などを行い、その成果の一部を『かたりべ』やプレ展示などで紹介してきました。そして、いよいよ二〇一七（平成二九）年一月より記念館の公開に向けた建物の保存改修工事が始まりました。

今回の工事は、一九一八（大正七）年に信太郎の父が現在の地に移り住んでから増改築を繰り返して、親子三代で住み継がれてきた「旧鈴木家住宅」が記念館に生まれ変わるため、老朽化による傷みの修繕と展示空間・事務空間を整備することを目的としています。工程としては、まず建物と庭園の工事を行い、二〇一八年三月の開館を予定しています。

現在、郷土資料館のリニューアルオープン（二〇一七年一月予定）とともに「（仮称）鈴木信太郎記念館」の開館に向けて、学芸スタッフ一同準備を進めております。ご覧いただけるまでもうしばらくかかりますが、楽しみにお待ちしております。幸いです。

（郷土 木下）

郷土資料館出前授業 「むかしのくらしを体験しよう」の実施と結果について

郷土資料館では、毎年一二月から二月にかけて、区内の小学校三年生に向けた展示を実施しています。社会科で、「昔の道具と人びとのくらし」という単元があり、今では使われなくなった道具を実際に見たり触ったりして、その使い方や特徴を調べることで、当時の暮らしぶりについて学習します。

しかし、当館は大規模改修工事のため、一昨年一二月より休館しています。そのため、今年度は資料館の学芸員が学校を訪問し、実物資料を通して体験する出前授業を実施することになりました。

各学校に持参する資料は、数量や重量に制限があるため、あらかじめ小学校の先生方と学習テーマを設定し、それに合わせた実物資料を選出しました。

学習するテーマとして提案したのは以下の通りです。①のぼす（火熨斗・鏝・炭火アイロン・電気アイロン）、②数える（そろばん・手回し計算機・電卓）、③てらす（ひょうそく・燭台・カンテラ・ランプ）、④炊く（釜、おひつ・しゃもじ・電気炊飯器）、⑤洗う（洗濯たらい・洗濯板）、⑥書く（矢立・鉛筆・ガラスペン）、⑦はかる（天秤・枰・鯨尺）、⑧

あたためる（湯たんぼ・白金カイロ・豆炭あんか）。また、「地域のむかし」を映した写真や地図などを見てもらい、自分たちが普段見ている風景との違いを感じさせ、生活をしている場所・地域への関心を惹き付けるような導入の時間を設けました。

期間を限定して募集したところ、たくさんの方に学校にご応募いただきました（南池袋小学校、池袋小学校、目白小学校、千早小学校、西巣鴨小学校、高南小学校、池袋第一小学校、長崎小学校、清和小学校、さくら小学校、以上一〇校にて実施）。

授業後に実施した先生方からのアンケートの中には、本などの資料でしか見たことがなかった道具を実際に近くで見

たり触ったりできてよかった、というよきな感想を多くいただき、専門的な知識を持った者に解説をしてもらえた点についても、好評をいただきました。

一方、限定した少ない資料を、わずかな時間の中で体験をしなければならなかった点や、児童が道具に触れる際に、人員不足で十分に目配りができなかった点などは今後の課題となりました。

豊島区立郷土資料館は、平成二九年一〇月にリニューアルオープンします。出前授業で取り扱った内容は、企画展示として小学生の郷土学習を進めていくうえで有効な構成になるよう検討しています。また、豊島区の歴史や文化について学習できる展示もおこなう予定です。

地域博物館と区内小中学校・先生方と連携し、児童・生徒の学習効果が高められるよう今後も鋭意努力していきたいと思えます。来年度は資料館でお会いできる日を楽しみにしております（学校連携担当一同）。

謝辞 急な募集にも関わらず、たくさんの方に学校にご応募いただき、また先生方には多大なご協力を賜りましたことを、この場を借りて御礼申し上げます。

（郷土 高木）



郷土資料館の役割や資料の取り扱いについての諸注意を映像で説明しています。



「のぼす」道具 火熨斗・鏝の使い方や特徴を説明しています。

連載「絵はがきは語る」(9)「巣鴨監獄の誕生」

前号では、明治二八（一八九五）年北豊島郡巣鴨村に設置された「警視庁監獄 巣鴨支署」（明治三十六年「巣鴨監獄」と改称）の経緯と、その後巣鴨刑務所、東京拘置所、巣鴨プリズン、東京拘置所を経て、昭和五三（一九七八）年サンシャインシティがオープンするまでの変遷を紹介しました。今回は巣鴨監獄誕生の背景と建築について見ていきます。

巣鴨監獄の設置は、石川島監獄署の腐朽と衛生上、監視上、立地上の問題が直接の理由でしたが、当時「監獄改良」は



①表門は東向きで、旭日の縞模様を配し、威厳を感じさせる。南北西に裏門がある。



③④中央看守所から放射状に配された已決監。建物に沿って芝生と街路樹が続く。



③「中央監視台より見た監房と廊下」の英文説明がある。凝った装飾も注目される。



⑥八角形の炊所及び浴場。物品集散所、掃溜場、洗濯場、物置が隣接する。

「囚鑑日本の監獄史」一九八五年）。その候補地として深川区洲崎町、南葛飾郡亀戸村、南豊島郡渋谷谷村が検討されましたが、最終的に巣鴨村に決定します。明治二年、東京府は建設費四〇万円（うち一〇万円は国庫補助）を計上し、工事設計及び監督を米國建築學士で臨時建築

局技師の妻木頼黄に委嘱し、明治二四年五月に着工、約四年半を費やして明治二八年一〇月に竣工しました。妻木は東京府庁舎、横浜正金銀行など数多くの官庁建築を手がけ、明治建築界の三巨頭のひとりとされています。が、監獄建築にも熱心でした。巣鴨監獄完成後の講演の中で、欧米の実地調査をもとに、監獄の立地条件や建築上の留意点、特に通気等の衛生面と監視面の改良を強調し、監獄には多額の建設費を要するため国の補助が必要であること、建築とともに監獄則の整備が伴わなければ本

当の改良はできないことを指摘しています（『大日本監獄協会雑誌』明治三〇年）。約六万二五〇〇坪（約二〇万六六〇〇㎡）の広大な台地に建つ煉瓦造の巣鴨監獄は、欧米の一流監獄に比して遜色ない「模範監獄」「国際監獄」として評価されました。

しかし、巣鴨刑務所と改称した翌年の関東大震災で被害を受け、昭和一〇年府中に移転します。「一大城塞の偉容」を誇った建物は、約四〇年で姿を消すことになったのです。（郷土 横山）

治外法権の撤廃に向けた「内務行政の悲願」でした。安政五（八五八）年の五箇国条約により日本には外国人に対する領事裁判権がなく、収容できる監獄もなかったため、「不平等条約改正にかけた国際水準の監獄を、都心にもうけるべきであるとする必然的要請に立つもの」だったのです（重松一義「人足寄場と石川島監獄」『人足寄場史』一九七四年）。同『囚鑑日本の監獄史』一九八五年）。

局技師の妻木頼黄に委嘱し、明治二四年五月に着工、約四年半を費やして明治二八年一〇月に竣工しました。妻木は東京府庁舎、横浜正金銀行など数多くの官庁建築を手がけ、明治建築界の三巨頭のひとりとされています。が、監獄建築にも熱心でした。巣鴨監獄完成後の講演の中で、欧米の実地調査をもとに、監獄の立地条件や建築上の留意点、特に通気等の衛生面と監視面の改良を強調し、監獄には多額の建設費を要するため国の補助が必要であること、建築とともに監獄則の整備が伴わなければ本

ました。左の英文の絵はがきはその宣言のために作成されたものでしょう。外堀は高さ約五・四m、全長約一・六kmで、四隅には高さ約八mの高見張が配置され、表門は鉄格子扉と槻製扉の二重扉とし、脱獄防止策を講じています。中央正面の事務所には、左右に三階建の中央看守所があり、そこを中心に平屋建の已決監が放射状に配置されています。一〇棟の監舎には三〇〇の雑居房があり、収容人数は二四〇〇人でした。また構内には芝生を敷き、電線が架設され、運搬用トロッコのレールが建物間を繋ぐなど、近代的な設備が導入されました。

作品を見つめる

10

山下菊二《牛》



図1 山下菊二《牛》1957年、油彩・カンヴァス、45.6×88.3cm、豊島区蔵

複雑な黒を基調に、頭部の輪郭と眼窩が画面中央に浮かび上がります。タイトルからこれが牛だろうと推測すると、その左手下方に、この二つ並んだ円形は鼻かと思わせて、もう一頭の顔が見えてきます。二頭の牛の胴体や脚は、どこから

どこまでが一頭分なのかわかりません。

また、画面の右側には白い骨（人の腕と手？）のようなものが描きこまれており、右上部ではその骨らしきものが横方向にも認められ（魚？）、その先端は鋭いくちばし状の曲線を見せています。傍らにあるのもう一つ眼でしょうか。形から連想されるモチーフはここまでで、右手前の「-57 K.Yamashita」という書き込みの下にあるのは、魚のひれにも見えますが具体的にはわかりません。黄褐色の背景にそれぞれが微妙に重ねあわされ複雑な層^{*1}をなし、深みを出す一方で、穏やかな空間で草を食む牛ではないことを伝えています。

これは（図1）、山下菊二（一九一九—一九八六）が一九五七（昭和三二）年に制作した油彩画で、同年二月に開催された「四人展」（図2）の出品作です。四人展とは、入江比呂（一九〇七—一九二二）、大塚睦（一九一六—二〇〇二）、高山良策（一九二七—一九八二）、山下菊二の四人が、一九五五年に第一回を、五七年、五八年と三回開催して終了したグループ展です。

その第一回展の出品目録冒頭には、前衛美術会^{*2}所属メンバーとして久しぶりに小集団展を開きます、と書かれています。五十音順でもありつつ、年長者からきれいに名前が並べられたこの四人は同会メンバーであり、入江と山下に最大一二歳の開きがありながら、ウマがあう仲間だったようです。入江が一九五三年に練馬区に移るまで、四人とも豊島区内の要町や千早に住んでいて、往来は頻繁。大塚家では食事や議論もたびたびだったといえます。彼らの表現の前衛的傾向とこうした交流は、池袋モンパルナスの精神を引き継いでいるとも言われています。なお《牛》は、入江旧蔵作品です。

山下は、諷刺やユーモアをまじえながらも、権力や差別と対峙した制作で知られる作家です。《牛》は、その重層的な描き方が、モニタージュの技法やイメージを組み合わせて使う山下のほかの作品との類似を感じさせます。山下は時勢を絵画化し、画風を変えながらも制作の態度を終生変えませんでした。二度の招集を受けた山下が「戦争が市民生活にもたらした過酷な状況の下で、自分がどのように生きたかという真の命題が貫ぬけたかどうかは、その人の絵が証明していると思います。」^{*3}と語る通り、激烈とも

いえるほど強固な制作態度でした。大作ではないながら、それは本作にも表現されているために、安穩^{あんゑん}としない牛であり、骨のイメージなのではないでしょうか。一九五〇年代に画家たちが向き合っていたといえるのは、十余年経っているとはいえ、自らも加わった戦争体験と、その後の社会状況なのです。



図2 4人展ハガキ
1957年2月25日—3月3日
於美松書房画廊
大塚睦氏旧蔵資料

（美術 小林）

*1 修復記録によれば、画面には部分的に金色（真鍮）と銀色（アルミニウム）の光沢が認められ、その後の制作の試行的可能性もうかがわせる。

*2 前衛美術会は一九四七（昭和二二）年に結成された美術団体で、戦前に福沢一郎を中心に結成された美術文化協会が一九四六年に分裂、その急進派と旧プロレタリア美術作家とからなる。

*3 「作家訪問 山下菊二」絵具箱からの手紙「三四号、ホルベイン工業株式会社、一九八六年。」

「旧鈴木家住宅」の資料たち

第9回 信太郎のゴルフ人生、ゴルフ哲学



1967年10月9日 我孫子G.C.にて
左から角川書店創立者の角川源義、
小説家の獅子文六(岩田豊雄)、信太郎

『鈴木信太郎全集』第五巻の巻末に掲載されている「鈴木信太郎著作年譜」(著作)

以外のプライベート情報の記載も豊富)を眺めると、信太郎がフランス文学研究のみに没頭していたわけではなく、多彩な趣味を楽しんでいたことがわかります。将棋・麻雀・篆刻など……。

なかでも一九三三(昭和八)年六月、辰野隆らとともに三八歳で初めてコースに出て以降、晩年まで親しんでいたのがゴルフです。翌三四年四月にゴルフ道具一式を揃えた信太郎は、「五月頃から月に十日はコースに出た。正確に勘定すれば、昭和九年八月から十年七月までの一箇年間に、百三十二回コースに出て、殆どいつも一ラウンド半乃至二ラウンド廻」った、としており、一年間で二〇〇

ラウンド以上したことになります。

ここでゴルフに関する基本的な事項をごく簡単に解説しましょう。

ゴルフを一言でいうと、「どれだけ少ないスコア(打数)でコースを回れるか」を競うスポーツです。例えば、「一八ホール、パー七十二の△×カントリークラブを一ラウンドして、スコアが一〇〇だった」とします。これは、△×カントリークラブに出向き、多くの場合ゴルフ仲間四名ひと組で、四〜五時間程度かけて一番ホールから一八番ホールまでプレー(ラウンド)し、規定打数七十二のところ、スコアは二八オーバー(+28)だったということになります。

先に掲げた信太郎の年間二〇〇ラウンド以上というのは、おそらくプロゴルファー並み、あるいはそれを上回るほどの驚異的な数字と言えます。さらに言うと、現役の大学教員がなぜ実現可能なのだろう……?と思わせるような、不思議な数字でもあります。

ちなみに、現在、スコアが一〇〇を切る事が、多くのアマチュアゴルファーにとつての当面の目標であり、「スコア

一〇〇」は平均以上の腕前か平均以下かのボーダーラインということにもなっているようです。

さて、旧鈴木家住宅には、複数のゴルフ(キャディ)バッグとクラブセットが遺されています。左の写真はそれらのなかでも最も古い一九五〇年代前半に製造されたゴルフクラブが収められているもので、おそらく信太郎が使用したものです。もちろん、ウッドのヘッドはバシモン(柿の木)を使用、アイアンのシャフトはスチール製です。パターやウエッジ類は残念ながら欠けていますが、ゴルフバッグに収めるクラブ番手など、当時のゴルフ事情を知る上でも貴重かつ興味深い資料と言えます。

気になる信太郎のゴルフの腕前ですが、シングルプレーヤー(ハンディキャップがひと桁の上級者)ではないものの、アマチュアゴルファーとしては相当上手



COMPETITION		SCORE CARD								
Rank	Score	Rank	Score							
1	540	325	4	13	5	470	435	5	6	
2	385	360	4	11	11	395	375	4	2	
3	195	140	5	17	12	509	455	10	19	
4	340	315	11	11	15	138	138	11	18	
5	325	300	11	11	14	335	315	4	16	
6	355	355	4	9	9	138	138	5	17	
7	195	170	3	5	7	16	395	370	4	4
8	545	515	5	7	7	419	399	4	14	
9	365	340	11	11	11	16	365	340	4	14
Total		3,015		2,020	25	3,165		2,810	26	
PLAYER:		S.180		5,250	71	S.180		5,250	71	
APPROVED BY:						NET SCORE:		41 84		

かったようです。随筆の記述によると、四五〜四六歳にかけて三度のハーフ三〇台(前半なはいは後半の九

ホールでスコア四〇を切ることを記録しています。信太郎は生涯にホールインワンを一度経験していますが、瞬間的な喜びであるホールインワンよりも、「何と形容してよいか解らない快樂」とハーフ三〇台で廻った喜びを表現しています。右のスコアカードは、一九五九年五月一日、我孫子ゴルフ倶楽部(パー71)ラウンド時のもので、一八ホールを八四打(+13)で回っています。左上には「戦後最高の Score」のメモ書きがあり、六三歳になってもより良いスコアを目指す信太郎のゴルフに対する姿勢がうかがえます(五〇代半ばの筆者のベストスコアは九五打(+24)で信太郎に遠く及びません)。(郷土 秋山)

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財(建造物)旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「仮称 鈴木信太郎記念館」を開設する取り組みを進めています。

豊島区ゆかりの作家たち

豊島区では、戦前から今日まで著名な作家たちが暮らし、集い、活発な創作活動を続けています。大衆文学、詩歌、児童文学、童謡、童画、マンガなどジャンルは多岐にわたり、ゆかりのある主な作家だけでも百名以上になります。このコーナーでは、ゆかりの作家ひとりひとりを紹介します。

時代小説家 山手樹一郎

【山手の生い立ち】

「桃太郎侍」「夢介千両みやげ」などの作品で大衆から絶大な人気を誇った時代小説家・山手樹一郎(本名 井口長次)は、一八九九(明治三二年)二月一日、栃木県那須郡黒磯町(現・那須塩原市)で生まれました。

中学卒業後、出版社に入社した山手は編集の仕事しながら「井口長次」名義で少女小説を発表するようになります。

父親の病気を機に、一九二四(大正一三)年、東京府北豊島郡長崎村(現・豊島区要町)に居を移すと、晩年まで五四年間を同地で過ごすこととなりました。

一九三三(昭和八)年に『サンデー毎日』の大衆小説懸賞募集で佳作を受賞すると、以後は「山手樹一郎」の名で三百を超える作品を生み出しています。



山手樹一郎記念会提供

【山手邸での勉強会「要会」】

売れっ子作家だった山手の自宅には、原稿の完成を待つ編集者や、山手と付き合いの深い作家らが集まりました。

山手邸では大衆小説研究会が定期的に開催され、一九五三(昭和二八)年にはその会に「要会」と名前がつけます。この会名は、やがては大衆文学界の要になるという作家たちの思いと、山手の家が要町にあったことに由来しています。上野一雄、村松駿吉、穂積鷲に山手が加わり始まった勉強会は、池波正太郎や郡順史らに加わり、一九七二(昭和四七)年に山手が入院するまで続きました。

【「新樹の会」との付き合い】

山手は長年の編集者経験から、多くの若手作家の育成にも尽力しています。一九五七(昭和三二)年二月、「要会」から派生した若手作家の勉強会「新樹の会」は、同人誌『新樹』を創刊し、小説や評論を発表しました。発足時の同人は一条明、郡順史ら七名で、同誌に連載

された永岡慶之助の「斗南藩子弟記」は、直木賞候補に選ばれ注目を集めました。

二号後書きには「われわれが『新樹』1号及2号を世に送ることができたのは、長い間われわれの文学的指導者として物心両面に多大の援助を与えてくれた山手樹一郎先生の絶大な尽力によるものである。先生の真摯な鞭撻がなかったならば、あるいは『新樹』は生れなかつたかも知れない。」(文章ママ)と記されており、師と仰ぐ山手に対する『新樹』同人たちの思慕の念が感じられます。

山手と同人たちは連れだつて出掛けては親睦を深め、その時撮影された写真がアルバムに仕立てられ、同人たちから山手に贈られました。(文学・マンガ 安達)



アルバム「新樹・一日散歩」
(撮影・編集) 木屋進、植木繁、水野泰治、一条明、松永義弘
山手樹一郎記念会寄贈

郷土資料館・ミュージアム開設準備グループ

事務室移転および日程のお知らせ

- 日 程 2017年5月1日(月)より開始
※展示室は10月1日(日)より(予定)
- 移 転 先 〒171-0021
豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ(IKE・Biz)7階
- お問い合わせ 郷土資料館管理運営グループ 電話03-3980-2351
ミュージアム開設準備グループ 電話03-3980-3177
月曜日～金曜日(祝日、年末年始を除く)
午前8時30分～午後5時15分

かたりべ
No.123

2017年3月24日

豊島区立郷土資料館
(休館中)

東京都豊島区西池袋2-37-4
としま産業振興プラザ7階

電話 03-3980-2351

URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/bunka/shiryokan/index.html>